

柴犬

花子のたび

sample

作まぐだれいな





【花子の家族】

わたしは花子、6 さい。お父さん、お母さん、そして、お兄ちゃんが2人とネコのミー姉ちゃんとくらしています。きょうも、ミー姉ちゃんと おるすばん。花子はあそびたくて、しかたがありません。

「あっ、お兄ちゃんのボールだ」。つくえの上にあるボールにとびかかったとたん、パターン！と本もおちてきました。

「うるさいね。あそんでばかりしないで、勉強しなさい！」

「べんきょうって、なにをするの？」

「わたしはね もうとしだから ゴロゴロしているけど、わかいときは 夜会に行ったの。近所のネコたちがあつまって、3 けんとなりのニャ太郎は家出したらしい。むかひの白ネコは、車にはねられたんだって。そうやって、なかまが少しずつ、いなくなるんだよ」。



sample

【カラスのいじわる】

「ジェリー、あそこの池まで かけっこしようよ！」ともだちのジェリーと いつものように公園の池につきました。

パンのかけらを ついばんでいたスズメたちが、「チューン」とさけびだしました。

2羽のカラスが バサーッと 羽を広げて立ちはだかり パンにとびついたので。

「おれさまが、先だ！」えらそうなカラスを見てハトたちも「また、よこどりして」と、にげていきました。

「だめだよ、スズメさんが見つけたんだから。じぶんで みつけなさいよ」

花子はしっぽを きゅんと立て カラスを しかりました。「そうだ、いじわるするな！」

ともだちのジェリーも いっしょにおこりました。

カラスは花子を にらみつけて「ふん、あんたたちは人間から食べものを もらっているじゃないか」

お母さんから食べものをもらっている花子は 口ごもり、「でも、弱いものいじめは よくないよ」というのが やっとでした。



【いたい！ あっ、アリさん】

花子はヤナギの木の下で チクツとさされた まえ足をなめていました。

「ちょっと、なかまを ふまないで」 ベンチの上で一匹のアリが 2本の長いひげを動かし あごをつきだして おこっていました。「ごめんね。ちょっと、考えごとしていたの。何をはこんでいるの？」 アリは前の足をとんと あげて「家族にたべさせるの」とくいげに言いました。

「でもね。人間の足が 空からおちてきた時は、たいへんなの。死んだふりをしたり、体をよじつて にげるの。 まあ、私たちは ぐちを言う ひまは ないの。 冬ごもりの支度で いそがしいんだから」 アリはベンチから いそいで おりて、なかまのあとを追いかけてきました。

「アリさん、人間の足に気をつけて。 また会えるね」

アリは ふりかえって「ありがとう。でも 会えないかも。 私たちは 1年か、2年しか生きられないんだって」 2本のひげを動かしながら、止まったり走ったりして草の中に入っていました。



【花子のためいき】

外はすっかり暗くなり 雪が舞いはじめています。ひとつ ふたつと、灯りが ともるのを眺めていた花子は、ふーっと、大きな ため息を つきました。

「どうしたの？ ため息ばかり。この頃、おかしいよ」 お気に入りのソファで寝ていた みー姉ちゃんが しんばいそうに花子を見えています。

「いつもの公園でね、スズメさんも、アリさんも、一生けんめい食べものをさがしているの。花子は お母さんから食べものを もらってる・・・」

「花子、旅にでなさい」「えっ、旅って？ どこに行くの？ 一人で行くの？」 花子は不安になりました。

「そう、一人で行くの。ネコだって、大人になったら夜会にデビューするの。花子はぬくぬく育て、いつまでも大人になれないんだから。 旅をして見てきなさい」

花子は 不安で いっぱいになり、暗い外を見まわしました。街の灯りがきらきら かがやいて、夜空に ゆらいでいました。



sample

【シロクマの赤ちゃんとキャッチボール】

つぎの朝、みー姉ちゃんは、さとすように 花子に言いました。「みんなが起きないうちに、早く行きなさい！ いいかい、人間には気をつけるんだよ。つかまったら保健所というところにつれて いかれるから。 つらくなったら帰っておいで。」花子は、ふーっと 大きく息を吐き、顔をキュンと上げて歩き出しました。 大通公園を通過、動物園に着きました。 おなかですいたので、ミーお姉ちゃんからもらった弁当を開けていたら「ウアー、ウアー」と泣くシロクマのあかちゃんの声。弁当を広げたまま、花子は走りだしました。

「ママ、お兄ちゃんが ぼくのボールをとった！」 双子の赤ちゃんがボールを取りあっています。花子はケンカしないように、ボールを運んで走りまわっていました。

「あれ？ 頭が3つ・・・」「いや、母親は上にいるな…。うっ？ 誰だ！ 犬なんか動物園に連れてきたのは」 太めで赤ら顔のおじさんが怒鳴ったので、花子はギクツとしました。 シロクマのお母さんが「左を曲がると、すぐ出られるから急いで行きなさい」

花子は転げそうに動物園の柵をこえ、きた道をもどり走り続けました。



sample

【おなかがすいて、まよう花子】

花子は家の近くで立ち止まりました。知らないお家から香ばしい匂いが鼻をくすぐってきます。おひるに食べたのは たった2コだけ。 腹ペコです。

「あれ？ ママ、あの犬、首輪をしているよ。 どこから逃げてきたのかな。」 玄関から女の子が出てきたので、花子は あわてて 門からはなれました。 お母さんたちが食事をしている家の方をじっと見ていましたが、 頭を横にふり きた道をトボトボと歩きました。 細い川の橋に向かって 冷たい風が吹きつけてきます。自転車のおき場所があったので、そこで泊まることにしました。

sample

「花子！ あした、海に行くよ！ お父さんは酔った顔を近づけてきました。 お母さんが「ほら、庭でとれたトマトよ。花子、好きでしょう」 花子は舌なめずりをして、大きく口を開けたら 夢からさめました。

「夢だったんだ・・・」 花子は前足に顔をうずめて キューン、キューンと 小さく泣き、いつのまにか ねむりに引きこまれていきました。



【カラスとしょくじ】

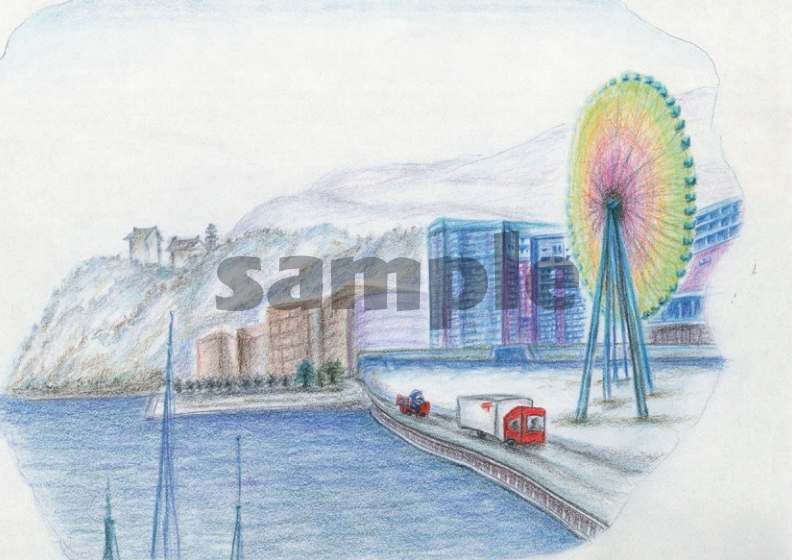
「カー、カー」 かん高いカラスの声で、花子は飛び起きました。食べ物をさがしてもみつかりません。のどがカラカラです。 雪をたべました。

1羽のカラスが、お弁当の箱を引きずって花子の前にポンとおきました。

「あっ、トマトだ！ 卵焼き、からあげ、ソーセージも はいっている！」 花子は むちゅうで食べはじめました。「カラスさん、食べないの？」 「うん、仲間が もってくるから、ぜんぶ食べていいよ。 人間がね、生ゴミと言って、ごちそうを袋に入れて捨てるんだよ。まあ、カラスもぜいたく できるってことさ」。

カラスが「ところで、どこに行くんだい？」 花子はしっぽを ゆらして「夕張！ マーリーに会いに行くの。 大通公園で 台にマーリーが すわっていたの。 夕張でまっているって。急がなきゃ」「あんたの足では むりだよ。夕張は遠いよ。 そうだ、いい考えがある。ゆうびんの車に乗ったらいいよ」

花子とカラスは創成川を下って行き、ゆうびん局のまえに止まっている 車を見ました。



【ゆうびんのくるまにのって、うみのまちへ】

「あの頭の赤い 大きな車にのったら いいよ」 花子は いそいで車にのりました。

カラスが「夕張は 山ぶかいので お腹が空いたら 人間が住む所に行きなさい。 夜は寒いから、三角の干し草に入って 寝るといいよ。あたたかいからね」「夕張には キツネやタヌキもいるよ。だますのが とくいなんだ。 枯れ葉にくるまった肉だんごが置いてあっても、食べてはいけないよ。 どうせ、木っ端さ。 クマにあったら、死んだふりしなさい。 吠えたら、するどい爪で、花子の頭は 一げきだ」 花子が「でも白クマのお母さんは、やさしいよ」「白クマだって、黒クマだって、こわいんだよ！」 花子は おくびょうだけど、なつこいので、カラスは心配で たまりません。

「林にオオカミの道があるから、近づかないようにね。 オオカミは あんたたちに にているけど、人間には近づかない。 気があらいから、気をつけなさい」

花子は カラスのこわい話を思うと不安でたまりません。でも、早くマーリーに会いたい。箱のベッドに横になり、車の音が心地よくてウトウトし 眠ってしまいました。



sample

【たすけて！ 雪あなに、おちる】

花子に乗せた大きな車は ニセコの道の駅に着きました。ギー、ガチャンと 扉のハンドルを外す音。花子はとびおきて、車から そーっとおり、ふるえながら 遠ざかるくるまを見ていました。

「うわぁー、大きい！ カラスさんが言っていた 夕張のお山だ！」

花子は 大きな山を眺めているうちに、前足からドスンと雪穴に落ちました。「助けて！」 呼んでも誰もきません。悲しくなってクイ〜ン、クイ〜ンと 泣き続けていました。

次の朝、カサカサ、カサカサと、雪をかきわけるような音。だんだん大きくなり せわしく動いています。花子は うれしくて、しっぽを大きくゆらして吠え続けました。

ついに、顔が出るほどに 雪穴の横が ぼっかりあきました。うす暗い穴の中を 白い毛のやさしそうな目が のぞき込んでいました。

「だいじょうぶ？ ケガは？」 白い犬が心配そうに言いました。穴をどんどん広げたので、花子は外に出ることができました。「どこから、来たの？」「大きな車に乗って、札幌から来たの。助けてくれてありがとう」 花子は、胸がいっぱいになりました。



sample

【たろうのかぞく】

「わたしは花子。名前は何ていうの?」「ぼくは、太郎! 小さい時に 死んだ お母さんが、太郎! 太郎! と呼んでいたから。今は、林の中のホラ穴に 住んでいるんだ」

そのとき、笹をかき分けて、オオカミの子供が転がるように 林から飛び出してきました。「お母さ〜ん! チビが出ていくよ」「人間の近くに行ったら、ダメ! もどりなさ〜い」子供を追いかけて、3匹のオオカミも出てきました。

「ぼくの家族だよ。小さい時ね、森で迷子になって オオカミのお母さんに助けてもらったんだ。お父さんは雪が降りはじめた頃、てっぼうで 殺されたんだ。人間にさ」

「どうして人間は そんな恐ろしいことをするの? オオカミは何も悪いことしていないでしょう?」

「人間は 殺した動物の皮で金もうけを したいのさ。そして 森の木もきってしまう。だから、オオカミも食べ物がなくなって、しかたなく、人の住むところに近づくの」

太郎が悲しそうに空を見上げて話すのを見て 花子も悲しく、聞いていて心が痛くなりました。黙って見守っていました。



【太郎とかけっこ】

太陽が昇る前から、辺りが暗くなるまで花子と太郎は、羊蹄山がみえる雪原で遊んでいます。太陽で雪がキラキラ光り ほうせきのようです。

「うわあ〜！」 雪に埋もれて鈍く光っている、黒いものに足を引っ掛けて花子は転びそうになりました。よく見ると、一本の枝のようです。花子はカラスが羽をパタパタ動かして話していたのを ふと思い出しました。雪の中から小枝をかきだして 強くひっぱり すばやく口にくわえ、キツネのように、跳びはねながら 太郎を追いかけてきました。

「太郎！ これキツネ？」 くわえた小枝を 振り回して太郎に見せました。

「バカだね。それはただの、木の端だよ」

そんなことは花子にも分かっていたのです。こんな広いところを走るのが とてもうれしくて、跳びはねていました。

何日も、何日も雪にまみれて遊びまわり、いく日も過ぎて行きました。



【クマのいちげき】

ただならぬ気配で林が動きだしました。林から太郎の弟、チビが キーと叫んで 雪だるまのように転げながら飛び出してきました。後ろから鼻息荒く、唸り声をあげて大きな黒いかたまりがおいかぶさるように追いかけてきます。「クマだ！ チビ あぶない！ 花子、来るな！」太郎のかん高い声に、花子は恐ろしくて 声もでません。

ギャーン・・・と、叫び声をあげて オオカミの子供が宙を舞い、雪の上にドスンとおちました。グォワー、太郎の家族が、ものすごい勢いで飛び出してきました。オオカミたちは 雪けむりをけ散らしてクマを取り囲み、牙をむいて ぐるぐるまわって威嚇しています。クマは後ずさりし、木を大きく揺らして去っていきました。家族はぐったりした子供の名前を 呼びながら走ってきました。オオカミの子供を 白い絹のスカーフで包むかのように、雪が降り注いでいます。

花子は何が起きたのか、心臓が凍り付き 立ちすくんでいました。うす暗くなった雪山を切り裂くように、オオカミの悲しい遠吠えが いつまでも いつまでも響いていました。



sample

【太郎とわかれ】

「家に帰ろうかな」花子は羊蹄山を 毎日眺めては 迷っていました。太郎は そんな花子を 心配そうに見ながら 林の中に帰っていきます。

ある日、「太郎、お家に帰るね」「帰る？ そうだね。花子には家族がいたね。 帰ったらいいよ。」太郎は足についた雪をなめながら、花子の話を聞いていました。

「太郎は、ここにいるの？」しばらく足元を見ていた太郎は 顔をあげて 静かに きっぱりと言いました。

「前にも話したけど、オオカミはね、ここにしか、いないんだ。 もう、どこにも いない。オオカミは、ぜつめつ したというけど、生きているよって 皆に伝えなきゃならないんだ。僕を育ててくれた家族のために、僕にできる、たった一つのことだからね」

太郎は、空を見上げて、ふーっと息を吐きました。それから、くるりと背を向けて 林の中に消えていきました。じっと、太郎を見ていた花子は、涙で林が かすんで見えます。

「太郎、またくるね」。花子の声が、寒い空に吸い込まれていきました。

sample



【羊蹄山のおはなし】

ぽっかりと あいた 花子の心に、冷たい風が通り過ぎていきます。

遠くから「花子さん」と呼ぶ声が かすかに聞こえてきました。「あっ、大きなお山さん！」
花子は羊蹄山のやさしい声に、どっと、涙があふれて 一気に話していました。「旅に出て大変だったの。 淋しかったの。 そして、太郎と別れたの」 花子は少し考えてから、ため息をつき、「うれしいことも沢山あったけど わすれてしまうの」

羊蹄山は 話をはじめました。「うれしいことを 心の中で大事に育てなさい。それが、ずっと、
幸せにしてくれるの。 太陽が あたたかい光で いき物を育むように。 あなたの心のなかでも、
大きくそだつの」

花子は おはなしを聞いているうちに あたたかいものが 心のなかに すーっと広がるのを感じ、
心の中で育てることも、分かるような気がしました。

「大きなお山さん！ ありがとう。もう、大丈夫」 羊蹄山に大きくしっぽをふると、
ピンクの光をまとった羊蹄山が 花子を包むかのように輝いていました。

sample



【花子、おうちにかえる】

「ブァン ブァ〜ン」と 頭の赤い 大きな車が近づいてきました。 この車に乗ったら札幌に帰れる、花子は急いで乗ろうとしたら、「カー、カー」と 懐かしい声。

「あっ、カラスさん！」 車の上にいるカラスを見つけた花子は、興奮して叫びました。「し〜、早く乗るといいよ。」 花子は小さい声でつぶやきました。「でも、お母さんたち、もう、花子を忘れたかなあ〜」「忘れる？ 電信柱にあんたの顔が、あっちにも、こっちにも貼ってあるんだよ。札幌中に知れわたっているさ」カラスは つづけて「それにね。あんた家のこわ〜いネコがね。毎朝、玄関に座って、じっと外を見ているんだよ。

あんたを待っているのかな。もう、歳なんだから、そんなに ガンバラらなくてもね」

「夕張に居ないと思ったら、ここに居たんだ。一緒に帰ってあげるよ」カラスは笑いをこらえて、中に入ってきました。 花子は、カラスのやさしい気持ちが うれしくなりました。

「お母さん、みー姉ちゃん、そして、みんな、あ・り・が・と・う」 （おわり）

いしだえほん No.0157

柴犬 花子のたび

2019年8月2日 初版発行

作 まぐだ れいな

印刷・製本・発行 石田製本株式会社

〒063-0836 北海道札幌市西区発寒16条14丁目3-31
TEL 011-676-4520
<http://i-bb.co.jp/>

©2019 Reina Maguda / Ishida Bookbinding

※本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）並びに無断複製物の譲渡及び配信は、著作権法上での例外を除き禁じられています。

また、本書を代行業者などの第三者に依頼して複製する行為は、たとえ個人や家庭内での利用であっても一切認められておりません。

落丁・乱丁はお取り替えいたしますので、弊社までご連絡ください。

ISBN978-4-909939-56-2

石田製本の直販サイト「いしだえほん」にて、
シリアスな物からシュールな物まで、楽しい絵本が続々発売中です！
<http://p-books.jp/ehons/>



ISBN978-4-909939-56-2
C8771 ¥1200E

定価：本体1,200円+税



9784909939562



1928771012000

sample